



Data

監督・脚本：深田晃司
出演：ディーン・フジオカ／太賀／
阿部純子／鶴田真由／アディパティ・ドルケン／セカール・サリ

■■■ショートコメント■■■

◆『歓待』（10年）（『シネマ27』160頁）でその才能を世界に見せつけた深田晃司監督は、その後も『ほとりの朔子』（13年）（『シネマ32』115頁）、『淵に立つ』（16年）（『シネマ38』79頁）等の素晴らしい映画を次々と世に送り出してきた。しかし、私には『さようなら』（15年）（『シネマ37』未掲載）がイマイチだったように、本作もイマイチ……。

本作で正体不明の謎の男「ラウ」を演じるのは、男前ぶりで人気沸騰中の俳優、ディーン・フジオカだが、イエス・キリストのような奇跡を次々と起こしながら、最初から最後まで正体不明のミステリアスな存在のままでは、そりゃ一体ナニ……？

◆2004年12月26日に発生したスマトラ島沖地震の津波によってインドネシアの街バンダ・アチェは壊滅的な被害を受けた。他方、2011年9月11日に日本で発生した東日本大震災を受けて同年末にアチェで開催された災害復興についてのシンポジウムに深田監督は記録係として同行し、はじめて出会ったアチェに大きく価値観を揺さぶられたようだ。

その中で私たちが生きる世界のマイクロからマクロまでの条理と不条理の縮図を見出した彼は、「インドネシアと日本の若者たちが出会えば何が起きるのだろうか。それを撮りたい。」と考え、そんな妄想から本作を作ることに……。

◆インドネシアは私たち日本人にとって短期の旅行で行くことはあっても、仕事上で定住することはあまりない国。しかし本作では、私の大好きな女優、鶴田真由が現地で災害復興支援の仕事をしている日本人女性・貴子役としてストーリー進行上のキーウーマンになっている。

その貴子の息子がタカシ（太賀）。そして、タカシの従妹がサチコ（阿部純子）。また、タカシの同級生がクリス（アディパティ・ドルケン）で、同級生のクリスの幼馴染がイルマ（セカール・サリ）だ。

◆本作のチラシには次の解説がある。すなわち、

人生は不条理 だから愛おしい・・・

ある日、海岸で倒れている男が発見された——

片言の日本語やインドネシア語を話す以外は正体不明

「ラウ」（＝インドネシア語で「海」と周りから名付けられたその男の周辺で、奇妙な出来事が次々と起こり始める

果たして「ラウ」とはいったい何者なのか・・・

また、本作のイントロダクションには「全ての生命を産み出す『海』 全ての命を奪う『海』 彼は『海』から現れた——」と、貴子が正体不明の男を「ラウ（海）」と名付けたことの深淵な意味（？）が短い言葉で解説されている。

◆それはそれでわかるのだが、現実にはスクリーン上で展開されるのはタカシとサチコ、そしてクリス、イルマたち若者のさまざまな「活動」だから、その中でラウが少しずつ見せていくイエス・キリストのような「奇跡」との繋がりがイマイチ不明……。そのため、私の本作の評価は星3つに……。

2018（平成30）年6月6日記